大阪■■哲学学校■■通信

No.44　2012.1.21.

大阪哲学学校運営委員会 Copyright©, 2012
【郵便振替】01170-1-81313
【E-mail】oisp@mac.com
【Home Page】http://oisp.jimdo.com/
【代表者】 山本 晴義（校長）
【発行者】 平等 文博（運営委員長）
【編集者】 平等 文博

２０１２年に向かって

山本　晴義（校長）

迎春

サウジアラビアの新聞『アラブ・ニュース』が昨年の 10 月 15 日に、「ウォール街の行動は中東諸国の“アラブの春”に驚くほど似ている」、それは「指導者が不在」であること、「怒りの共有」であることだと言っています。

私は昨年の１月、本紙に「２１世紀と『多極化』の時代――『パクスアメリカーナ』の崩壊」という主張を書きました。グローバルな新自由主義が行きついた「ドル機軸」の破綻。全米の貧困層が、全人口の１５％にあたる史上最悪の４６１８万人になり、米大企業の CEO の年収が労働者平均の３４３倍にいたるまで格差が拡大している情況を述べました。

そして 10 年４月、ギリシャ財政危機を契機に露呈した債務危機は、アイルランド、スペイン、ポルトガルへと広がり「ユーロ機軸」の崩壊が警告されています。他方、BRICS（中国・インド・ブラジル・ロシア・南アフリカ）など新興国の発展、先進国Ｇ７，８に代わってＧ２０が新しい国際秩序を形成しています。外部に仮想敵を持った軍事同盟に代わって、外部に開かれた平和の地域共同体が世界各地で発展しています。

現在すでに２１カ国と１機構による「アラブ連盟」があり、2011 年 12 月には３３カ国で「中南米カリブ海諸国共同体（CELAC）が設立、また 2015 年には「ASEAN 共同体」の発足が目指されています。

「中東の春」、一人の青年の失業に対する憤怒の焼身自殺から昨年１月 14 日にはじまったチュニジア革命、アメリカやＩＭＦの新自由主義的な圧力のもと、独裁と大半の貧困の中から、特定の政党の指導によってではなく、「４月６日グループ」という若者たちの呼びかけや携帯電話によって１月 25 日、非暴力で多様な巨大なデモという形で全国民的なエジプト革命へと拡大しました。

「１％」に怒った学生たちの座り込みから発展した、特定の指導者不在の「ウォール街を占拠（オキュパイ）せよ」デモは、たちまち米全土に、そして８０カ国以上の世界に広がりまし

た。

日本はどうか。東日本大震災と福島原発事故という未曾有の危機に、野田政権は、憲法９条を持つ国として、アメリカ一辺倒から抜け出してアジア諸国との平和の共同体へと向かう道を、「１％」のために破棄しようとしています。

反原発運動と「オキュパイ運動」との結合。反戦運動、労働運動、農民運動、女性運動、反公害運動や生活協同組合運動など、NGO や NPO の多様な運動、「アソシエーション革命」を「社会」のさまざまな領域で進めていくことが私たちの課題です。

2011 年 10 月　米ボストンの議会前にて

〈知の歴史〉入門講座

於・尼崎労働福祉会館　参加費・各回千円（維持会員五百円）

「ヘーゲル『精神現象学』を読む」（３回）

３月１０日、２４日、４月１４日

いずれも土曜日、午後１時３０分～５時３０分ごろ

講師・田畑　稔さん（本校参与、大阪経済大学教授／哲学）

【講師より】

今年で７年目になる。『精神現象学』は意識―自己意識―理性―精神―宗教―絶対知という構成になっているが、昨年は「精神」の中の「自己疎外的精神、教養」を読んだ。アンシャンレジームの精神構造、啓蒙主義の戦い、フランス革命とテロリズムなど舞台はフランスであった。今回は同じく「精神」の中の「自己確信的精神、道徳性」を読む。舞台はドイツに移り、カントの道徳的世界観やドイツ・ロマン派などが扱われる。ここでも道徳的世界観の孕む二律背反や美しき魂の孕む偽善が明らかとなって、宗教へと移るのであるが、宗教の最初の形態である「自然宗教」まで今年は読むことにする。

来年 2013 年の３回（芸術宗教、啓示宗教、絶対知）をもってこの「ヘーゲル『精神現象学』を読む」シリーズも完結する予定である。周知のように『精神現象学』は哲学史上でも屈指の傑作である。中途参加でも問題ないので、今まで参加していなかった人もこの機会を利用して挑戦してみよう。テキストは入手の便宜を考えて樫山訳（平凡社ライブラリー）で指示しているが、他の金子訳、牧野訳、長谷川訳などすでにお持ちの方はそれを利用していただいて結構です。

◆第１９回（３月１０日）
「カントの道徳的世界観」（平凡社版、下 191 - 225 頁）

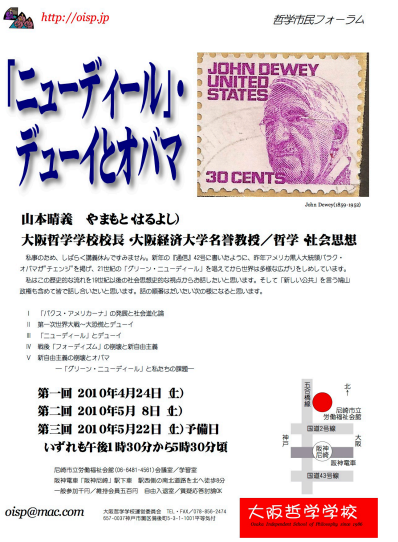
◆第２０回（３月２４日）
「良心、美しき魂、悪と赦し」（平凡社版、下 225 － 269 頁）

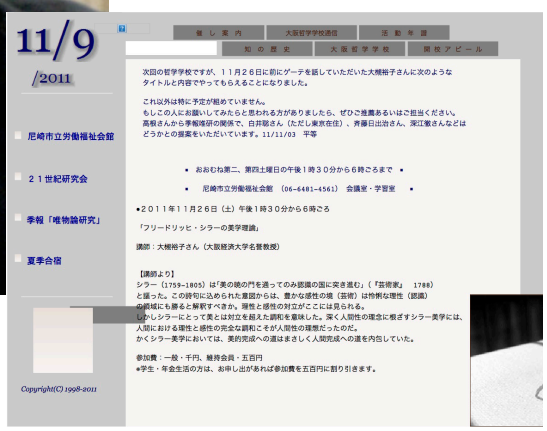
◆第２１回（４月１４日）
「自然宗教」(平凡社版、下 270 － 294 頁)

ありがとう　伊元 勇さん（本校運営委員）

2011 年 11 月 10 日逝去

新年交流会にて（2007 年 1 月 27 日）





本校運営委員を１５年にわたって務められ、ホームページとちらし作成を中心に広報面で哲学学校の活動を支えてくださった伊元勇さんと、ある時から突然連絡がつかなくなりました。その後、職場に問い合わせたところ､2011 年 11 月 10 日に交通事故で逝去されたとのことです。前日の９日、懸案だったホームページのリニューアルに着手されたばかりの出来事でした。

伊元さんが哲学学校に初めて参加されたのは、1995 年の阪神淡路大震災後まもなくだったと思われます。哲学学校はその年の９月に総会を開き、開校以来の大阪唯物論研究会哲学部会の活動から、運営委員会による独立した市民の文化運動へと性格を刷新します。伊元さんが運営委員になられたのは、翌 1996 年の総会からです。その後一貫して、上述のように広報面を中心に哲学学校の周知と活性化に尽力され、「納涼交流会」や「新年会」、夏合宿での「朝ヨーガ」など、率先して会員の交流を盛り立ててくださいました。その彼がいなくなったとは、いまだに信じられぬ思いです。

五十代という若さで、まだまだこれからが人生の本番という時に、彼自身はもちろんのことでしょうが、私たちの心も悔しさで一杯です。今はただ、伊元さんに感謝の意を表します。

2011 年 12 月　　大阪哲学学校運営委員会

伊元 勇 君　追悼

山本　晴義

11 月 27 日、伊元勇君の車で妻と私３人で六甲山の山頂までドライブし、帰り宝塚南口の女房推賞の“お好み焼き”の店で私がおごることになっていた。

少し理屈っぽいが、根っから親切で、独身主義者で、“ヨガ”にくわしい半導体専門の 52 歳の技師。彼が「哲学学校」に入会して１５年余りになるが、私が彼と親しくなった切っかけは、家が近いこと、自動車が好きで帰りにいつも送ってくれ、途中ファミレスで長々としゃべっている仲だったからだ。

六甲山ドライブはこれで３回目だが、家族のゼミナールのようなもので、私は「哲学学校」や市民文化団体「無葉会」で４月から６月、講師をした内容のうち、マーティン・ルーサー・キングの非暴力・公民権運動とラルフ・ネーダーの消費者・反公害運動と反二大政党政治について、伊元君は原発について……。

７月中ごろ、約束してから、私が腎臓の病気にかかり、信貴山の合宿も欠席することもあって、毎日のように、お互い電話がたえなかった。何度かけてもかからなくなったのは 11 月９日であった。

以前にもらった名刺をやっと探し出して会社に電話をしたのは 11 月末であった。会社の同僚が、「10 日、交通事故で亡くなりました」と言った。

10 月 27 日の無葉会の席上、彼は自己紹介で私の顔を向いて、「私の父だと思っている」と発言し、私はあわてたことを忘れられない。

2012.1.15.

【　ド・ウ・シ・テ　？　】

中村　りょう子

「　いもとさん　いもとさん　」、、、、、、
いもとさんを　中村は
いま　御呼びしています

聞きたくないことは唐突に知らされる

認めたくないリアルに
いきなり張り倒される

暮れ泥む師走

家路への曲がりを逆に向かう

今夜は　道草　を　しなくちゃ

水洟　が　流れ落ちる

2011.12.12.

伊元さんを悼む

木村　倫幸

伊元さんが亡くなられました。８月の哲学学校の合宿には、いつものメンバーとして参加されていたので、突然の訃報にびっくりしています。事故ということだそうですが、実に惜しい、の一言に尽きます。

また哲学学校には１５年前からの参加だということを聞きますと、もうそんなに長くなるのか、と改めてこちらのほうにも驚いています。

不思議に安心感を与える人でした。唯物論者ではなかったし、マルクス主義者でもありませんでした。むしろ霊性や預言について関心を持った人で、合宿の交流会でも、朝にヨーガの講習をやり、宇宙霊や大天使ミカエルについて熱心に語っていました。もちろんそのことで、立場の違う他の参加者との間で論争が起きました。しかし論争は、互いに批判こそすれ、他の多くの場合にともすればそうなってしまうように、敵対的な、喧嘩別れをしてしまうようなことには決してならなかったと記憶しています。

思想を対象とする研究会では、当然のこととして各人が持っている思想なり視点なりが論争の中心となりますが、しかし伊元さんの場合には、さらにその奥にある人柄というか、ものの

言い方というか、何か穏やかなものがあって、それが議論の時にもにじみ出ていたようです。いろいろな立場の人が集まってくる哲学学校のような活動では、これは大きな意味を持ってくるものだと思います。このような人が去っていったことを、心から悲しみ、残念に思います。

2011．12．20.

こころより哀悼いたします。

どうぞ安からに永遠にお眠りください。

泉　史（ふびと）

「伊元勇さんが、先月、交通事故で急逝されました。」

このニュースは、わたくしにおどろきを、与えました。そして、次々にいくつかの伊元さんのシーンが浮かびました。

私事になりますが、「大阪哲学学校」をはじめて知ったのは、21 世紀に入った頃でした。そのころは、兵庫県の高砂市に住んでいて、大阪市に転居する予定にあったのですが、突然大地震に遭遇しました。それが、淡路阪神大震災と一般に呼ばれます。それで、引っ越しは延期して事態を見つめました。

そのなかに、新聞の阪神版も間違ってでしょうか、配達されて来ました。丹念に当時、新聞を読んでいました。そのなかに「大阪哲学学校」と「唯物論研究会」の記事が本当に小さく載っておりました。

わたくしは中高校生のとき、阪神間に居りました。父の知人たちの、戦前の労農派や社会主義協会系の末端に居た人たちから、理論らしきものを教わりました。年長者から紹介された若い人たちの社会主義青年同盟に属する人から、日本共産党の考えとは違う講座派の考えに触れて新鮮でした。ポーランドのアダム・シャフやフランスのルフェーブルらの人間疎外論を知ったのもそのころでした。合同出版の本を多くもっていたのですが、度重なる転居で消えてゆきました。

社青同の若い人たちのマルクーゼのマルクス初期の研究書を勉強していた会に一度だけ出て、附いて行けないことにだめだと責めたのを思い出します。大学の先生たちのマルクス主義が無意識に講座派に引き摺られていて、面白くなかったのを思います。（社会党がなくなるまで、父は社会党支持でした。）

わたくしはいまでも、向坂逸郎ら社会主義協会への罵詈・悪口を聴くのは嫌いです。わたくしは、思想として、かっての労農派の問題意識にはいまも吸い寄せられます。

うまく言えませんがこう言う内面があったので、先の新聞記事を観て、関心を持ちました。大阪市に来たのは十三年前です。

そこで「大阪哲学学校」にすこし出入りしました。そのとき伊元さんが居ました。会ではいつも黒い服を着ていたので、最初、イタリアのファッショの国家社会主義の信奉者かと思ったほどです。またパソコンを肌身離さず、不思議な個性を感じました。

わたくし自身は芯は感情的なのでそのバランスを取るために、理論を好み理論を道具に人と御付き合いをするので伊元さんとはほとんどつっこんだ個人的な会話をしたことがありません。でもわたくしは、伊元さんが理想や夢を持っていることは直感していました。

ただその理想や夢を実現することに彼は、無関心だったとわたくしは、今、感じています。

もしそれが的を射ているならば、どうしてなのだったかと思います。それは実際に彼から受ける現実放棄の姿勢にどうしても同調出来ないわたくし自身の偏見かもしれません。

言えば、わたくしが性悪説に立ち、伊元さんが性善説に無意識に立ち、過去に深く傷つき、人間に対する不可解な矛盾に振り回された経緯があったのかもしれません。わたくしの眼に焼き付いているのは「大阪哲学学校」の事務にかれは、こころからそれを天からの所与と受け止めて内面に嬉々とこなしておられた姿です。あ

れはだれにもマネの出来ぬ営為であって尊敬に値します。そう言う尊敬人をひとり喪いました。悲しみが天に届き、この地上で哀悼を申し上げるものです。

2011年12月20日

伊元　勇さん、ありがとう

藤田　隆正

この世の中、何が起こるかわからないといわれますが、まさか伊元さんが逝くなんて……。今夏、大阪哲学学校合宿の帰り、たまたま二人だけになり、始めて一時間ほど雑談をかわし、いままで以上に親しさを感じた矢先の出来事だけに、いいようのないショックを受けました。

いつも山本校長のそばに、息子のようにつきそっていた姿がとても印象に残っています。

あなたが活躍し愛された大阪哲学学校は、残された私たちが支えていきますので・・・。

２０１１年　寒冷の雪見月　２６日

伊元　勇氏　死去を悼む

神崎　房子

大阪哲学学校の伊元さんが死去されたと聞いたとき、失礼ながら嘘ではないかと思った。彼はとても亡くなるような体格の人でなく、むしろゆったりした立派な態度の紳士で、もの静かな声で発言する男性だと認識していたからだ。

私は時間の融通がつける時しか哲学学校に参加できないので、伊元さんのこともその他の人々にもあまり詳しくは知らない。

同校に通いはじめて何年か経つというのに、今頃になってようやく伊元さんを覚えたという次第であるから、ここに追悼文を書く資格があるといえないかもしれない。

今夏、初めての合宿参加で、彼からヨーガの指導を受けて、やっと彼を覚えることが出来た。

聞くところによると、彼は大阪哲学学校では重要な役割を担っており、同校の事務などを担当されていたと聞くが、彼の死去によって彼の手元にある事務書類の行くへが気になる。

しかしそれ以上に気になるのは彼のお母上のことだ。

お母上は彼から介護を受けておいでになっていると聞いている

介護者がいなくなって、お母上のこれからの生活はどうなるのだろう？　母上も息子の突然の死去をどのようにして納得されているのだろう？

留学生の保証人にしろ親の介護にしろ、日本ではいつもそれは「個人」に押し付けられており、多くの日本人はそれを困ったことだと感じていても、だから改善しようという意志も行動も見られない。

政府が決めた制度なのに、個人に押し付けるこの制度に、政府は今も知らん顔である。

そして押し付けられている国民の側もそれを疑わない。

それどころか、それを特定の個人に強制を奨励しており、介護に関わろうとせず、周囲の人達もそれを当然としている。

自分は介護に参加せず、娘とか嫁の立場であるとかの理由で、（息子の妻と息子の親とは赤の他人）介護を一人の女性に押し付けているのが日本社会である。

伊元さんは女性が親の介護をするのが当然と認識されている日本社会で、珍しく男性の彼がそれを担っている。

もし高齢者介護を個人でなく社会が担う仕組みになっていたら、次世代は自分の人生を思い切り生きぬけられるかもしれない

親もまた、自分の存在が子供たちの人生を縮小させているのではないかと気遣う必要がない。

北欧の国々では高齢者の介護は社会が担っている。

介護の技術的面はヘルパーが担い、心の問題は身内が担当している。心の問題だけは親子兄弟姉妹や孫など、身内や親族でなければできないからだ。

ヘルパーが高齢者の介護をするとそれは労働市場拡大になる。介護はひとりでなく複数で行っている。

密室介護は一対一になり、場合によっては虐待という名の犯罪が成立してしまう場合があるからだ。

絶対ではないにしても、複数だとそれが避けられるし、なにより労働市場が二倍になる。日本人は「働けるのに生活保護を受給している」と難じる人がいるが、それは労働市場が極めて貧困であり、最低生活の保証がないからだ。労働市場確保とその提供は政府の責任である。

今回の伊元さんの場合のように、子の世代が先に亡くなるということがあっても、こうした制度があると、子ども世代も親の世代も安心して生き続けられる。

ここで不思議でならないのは、なぜ国民はそんなリーダーを選出しないかという疑問である。

果たして本当に日本では健全なリーダーがいないのだろうか？

国民が迷っているのはわかる。迷っているなら、せめて周辺の人々と議論し（話し合い）判断をするという生活的・基本的情報交換を行動でしないのだろうか？

音楽一つ聞くにしても各自イヤホーンでバラバラに聞く時代になった。カラオケでは密室に固まって「孤独」に歌い、欧州のようにかつての「歌声喫茶」のように、大勢で皆で合唱するという楽しさを共有しない。

「みんなで〜をする」と楽しさに気がつかないのかもしれない。しかし、その時代を知っている人々は現在も健在だ。

知っている人は知らない人に、それを伝える役割があるのではないだろうか。

孤独の恐ろしさに気がつかず、実際に孤独になった時にはじめてその痛みを知るが、「孤独の苦しみ」を解消するために、仲間を見つける努力が必要だ。知らない人は知っている人に、知っている人は知らない人に手を差し伸べるにはどうしたらいいのだろう？

「孤独な人」は自己が孤独であることを認めようとしないし、その認識はない。

権力は市民をバラバラにして権力保持をしたいのだろう。それはいつの時代でもどんな地域でもあり得る。

有権者はそれにはまらないよう、常にしっかりと権力をウォッチングをし続けないと、原発爆発・放射能漏れのように、わが命が危なくなる。

その点では「大阪哲学学校」は地域で大きな役割を果たしていると思う。

但し、「哲学」という言葉が生活からの乖離を感じさせている。同校はその解消に努める努力が必要かも？。

「哲学＝生活」を市民に認識・啓蒙させる役割があるかも？

伊元さん御逝去と少々離れてしまったようで恐縮だが、これを彼へ追悼文にしたい。

2012.1. 記

追悼の言葉

高根　英博

伊元さんは、そうとう哲学学校に愛着をもって入れ込んでいたように思う。平等さんの片腕で、山本先生のいいアッシー君だった。ホームページからチラシから録音から撮影までこなしてくれた。コメントは独特のものがあった。少し怪しく、ヨーガから精神世界まで入り込んでいた。つきあいもよく、去年の正月の中村さん追悼の京都での集いにも、姿を見せてくれた。

いつも飄々としていて、不思議な人だったが、まさかいなくなっちゃうなんて。怖いくらいに人が消えていっている。でも、伊元さんほど喪失感のない人はいなかったのに。最後の一人という余裕さえ感じられたのに。したがって、実をいうと、あまり突っ込んだ議論をした覚えがない。精神世界も「君は君で私は私だから」という感じだった。もっとお互いに真剣に議論す

べきだった。前回の夏の合宿も朝にヨガに参加すべきだった。寝過ごしてしまったのであった。伊元さんを始めとしてメンバーのいびきがうるさくて、眠れなかったのだ。

大阪哲学学校の運営が、平等さんの肩にかかって、建て直しにせまられている。私なりにあらためて、参加していくつもりですので、大阪哲学学校をもり立てていきましょう。大阪哲学学校はまだやることがたくさんあるでしょう。いろんな証言を聞くことも必要でしょう。大阪という場所を含めて課題はたくさんでしょう。今までの哲学学校の実績もありますし、ホームページも充実を図りたいと思いますし、本も出していきたいですね。伊元さんの持続力を見習いたいです。伊元さんのチラシデザインも立派になってきたんだけどなあ、誉めてなかったなあ。

伊元さんとの別れ

平等　文博

何歳か年下でもある伊元さんとの別れが、これほど無慈悲にも不意打ちで来ようとは、思いもしなかった。

伊元さんから Cc. で届いた高根さん宛てのメール（2011 年 11 月 9 日 18:33:52 発信）が、彼の無事を確認できる最後となった。高根さんが『季報・唯研』のホームページを作られ、「伊元さんにも見てもらいたい」とのことで、彼にそれを知らせた返事である。そこには、「母の転院以降いろいろあり十分メールを見ていなかったので遅くなりました。さすが綺麗で斬新なｈｐです。私も元気を出して迷惑をかけている哲学学校ｈｐを再構成したいと思っています。いつまでも素人センスですが」とある。

彼はこのメールを送信した後で、さっそく哲学学校ホームページの再構成に取りかかったのだろう。がらっとデザインの一新されたページが、まだ表紙だけの未完成な形ではあるが、9 日付でアップされている。

一区切りついて、今日はこれくらいにしておこうと手を置き、夜食でも買いに原付バイクで出かけたのだろうか――、そしてイズミヤ昆陽店前の交差点で事故に遭ってしまった。

翌10日の朝5時38分に私が、「哲学学校のページ、新しくしてくださったのですね」とメールし、一部文章の訂正をお願いしたのだが、彼からの返事はもう来なかった。

伊元さんとの出会いがいつだったか定かでない。1995 年の阪神淡路大震災の時に彼がいた記憶はないが、96 年 9 月の総会で彼は運営委員になっているので、その間のことであろう。

出自からマルクス主義や唯物論の思想系譜を継ぐ者の多い哲学学校にあって、神秘主義やスピリチュアリズムに関心の強い伊元さんは異色の存在だった。その彼が 15 年にもわたって運営委員として哲学学校に関わり続けたのには、彼なりのバランス感覚があったのだろうし、常に開かれた知的姿勢を堅持し異質なものに関心をもとうとする彼のスタイルがあったように思う。

世にはびこる怪しげな神秘的言説について彼と議論した時も、私の批判的コメントに対して一定同意しつつ、全否定することには強く抵抗した。言語化・論理化したり実証可能なもの以外は実在性を否定する近代的な知のあり方に、彼は強い不信感を抱いていたようである。それに対して、ヨーガなどの身体的実践とそれを通して直観的に感得されるものに惹かれていた。

しかし彼は、言葉や論理そのものに否定的というわけでは決してなく、可能な限りの言語的自己表現と意思疎通に努め、「我独り正し」という傲慢さからはるか遠いところにいた。

「親が死んだら自分の車にお棺を乗せて運ぶ」とベンツのワゴン車を横浜まで買いに行き、父を送った後、認知症の出てきた老母の慰めにオウムを飼い始めたと話していた伊元さん。体はごついが人なつこい風貌で、激昂したところを見せたことのない彼が哲学学校にもういないとは……。「出てくるのは今だよ」と軽口を叩きながら、私はまだ彼の死が信じられないでいる。

3・11から10ヶ月

いわき市・北茨城市の現状

関口　敦男（会員）

はじめに

2012年1月11日で東日本大震災から10ヶ月を迎えました。仮設住宅や公共住宅へ被災した人達は移り、住む所は確保したものの、雇用や生活再建の目処はまだまだと言えるだろうと思います。さらに政府は福島原発事故の収束宣言をだしましたが、福島原発の近隣にあるいわき市、北茨城市では年末に学校の除染が始まったばかりで放射能汚染の不安は重くのしかかっています。

更に福島市の定時降下物環境放射能調査では（定時降下物＝雨や塵に含まれる放射性物質）、7月まで減少してきたセシウム降下量は8月から11月までは殆ど1日平均10メガベクレル（1平方キロメートルあたり）程度でしたが、12月後半から上がりはじめ1日平均33メガベクレル、1月5日までの平均が126メガベクレルになっています。特に1月2日にはセシウム134が180メガベクレル、セシウム137が252メガベクレルの値を検出しました。

また日本分析センターが行なう千葉市稲毛区の降下物の測定結果を調べてみると、こちらもセシウムが検出されていました。2011/12/26～2012/1/4の間の降下物のセシウム濃度はセシウム134が26メガベクレル、セシウム137が28メガベクレルの値が検出されています。原因不明ですがあの原子力安全委員会でさえ1月11日付け「文部科学省・環境モニタリング結果評価」で『福島県において、1月2～3日に採取された定時降下物から、Cs-134及びCs-137が比較的高い値で検出されています。引き続き注意深く見守る必要があると考えています。』と述べる事態が生まれています。

1、いわき市の状況

福島原発事故による避難区域に近く又非難準備区域に隣接する福島県いわき市の状況は東北の岩手・宮城とは違った福島県の原発災害による復興の矛盾を如実に示しています。

いわき市の市内被災者に対する一時提供住宅は応急仮設住宅が189戸・136世帯・359名と賃貸住宅等（雇用促進・教員住宅・民間借り上げ）が2,903世帯・8,334名になります（2011年12月26日現在）。一方で、他地域からの被災避難者の応急仮設住宅は広野町708戸、楢葉町984戸、富岡町282戸、双葉町259戸、大熊町407戸、川内村50戸の計2,690戸にのぼります。また、いわき市から市外に避難している市民が3,622世帯・7,320名（2011年12月27日現在）、いわき市内への避難者が双葉郡8町村20,105名、南相馬市776名、田村市24名、川俣町2名、飯館村16名で計20,923名にのぼり（2011年12月25日現在）、複雑な避難生活をおくっており被災者のコミュニティ形成に大きな課題を生じさせています。

このことは、生活再建に欠かせない雇用にも大きな問題生じさせていて、福島民友新聞8月27日付け報道によれば、『いわき市に双葉郡からの避難者が多く流入しいわき市ハローワーク管内の求人数は震災前の2月が約4600件だったが、6月には6000件と1400人増えた。しかし、有効求職者数も2月の約7900人から6月には約1万1600人と約3700人増加し』雇用情勢の悪化に歯止めがかからない状況にあります。

更に、震災で2回に亘って給付期限が延長さ

れた失業手当の受給が１月で打ち切ることを厚生労働省は決定しています。これについても福島民友新聞１月 13 日付け記事で『原発事故が起きた本県は岩手、宮城両県とはまるで異なっている。職場があった古里の除染が進まないために帰還できなかったり、帰還時期が見えない離職者もいる。古里に帰ることを考えたとき、再就職をするとしてもどこですればいいのか判断が難しい。事業再開を見据え、雇用を維持したままで休業を続けている企業もある。今回の反発する声は多い。』と批判しています。

またいわき市沿岸で津波によって大きな被害を受けた漁業関係者は、福島原発事故によって再開の目処もたっていないのが現状です。

NPO の被災者支援

いわき市中央台はいわき市内被災者向け応急仮設住宅 189 戸、広野町 235 戸・楢葉町 567 戸の被災者向け応急仮設住宅が建っています。しかし、同じ場所に住んでいた人が今はバラバラに住んでいたり、お互いのルールや考えていることの違いによる戸惑い。そして仮設住宅が高齢者には不便な立地になっていたりしています。そのような中でいわき市ではいわき市民と避難者との交流促進事業に補助金を交付しコミュニティ構築に力を注いでいて、地元の商店会と一緒に夏祭りやバザーをするなどの活動も進められています。

ボランティアも当初は復旧活動、食料に関するイベントが多かったが、現在は職業、学校、除染、保育、インフラ等の生活支援・正常化に移りつつあります。中央台でもいわき NPO ネットワークが「中央台暮らしサポートセンター」を立ち上げ、モンゴルの遊牧民の移動式住居「パオ」の形の建物から通称「パオ広場」と呼ばれています。日本各地からのボランティア活動拠点にもなり、そこでは介護や子育て、生活再建などの相談会や、マッサージやお手軽カットサロンを開き、仮設住宅住民の交流の場となっています。年末にはクリスマス会や復興市が開催されました。

２、北茨城市の状況

北茨城市でも放射能汚染の問題は深刻で市内の殆どが年積算放射能が１ミリシーベルトを超えるのにも関わらず健康に影響は出ない値であるの見解でした。しかし、子供を持つ親の心配は深刻で市主催の「放射能学習会」などで除染をするようにとの声を上げてきました。

このような中、2011 年 12 月 19 日原発事故によって拡散した放射性物質を取り除く除染について、環境省は、国が財政負担をして除染を行う地域のある自治体を発表し、このうち茨城県では除染を要望していた２０の市町村すべてが指定されました。

放射性物質の除染については、来年１月に施行される特別措置法で、年間の被ばく線量が１ミリシーベルト以上、１時間あたりの放射線量にすると０．２３マイクロシーベルト以上の地域を含む自治体を「汚染状況重点調査地域」に指定し、各自治体が国の財政負担を受けて除染を行うことになっています。

県内の自治体では２０の自治体が除染を求めていて、すべての自治体が指定を受けました。指定を受けたのは、北茨城市、高萩市、日立市、常陸太田市、東海村、ひたちなか市、常総市、土浦市、つくば市、つくばみらい市、阿見町、美浦村、牛久市、守谷市、取手市、龍ケ崎市、稲敷市、利根町、鉾田市、鹿嶋市です。

これによって早速、2011 年 12 月 23 日の学校が冬休みに入ってから市内全域で校庭の除染作業が行われました。

北茨城市で津波・地震による被害は平潟町東地区（津波被害）75 戸、大津港地区（津波被害）128 戸、旧磯原地区（津波被害）88 戸、上桜井地区（液状化による家屋倒壊）32 戸、その他の地区（地震による家屋倒壊）106 戸となってます。

北茨城市は「市災害復興計画策定委員会」を設置し、復興に向け被災者の意見聴取と計画作りを開始しました。その市民意向調査結果では、「津波被害を受けた沿岸部の被災家屋を解体、又は解体予定の住民約7割が「別の場所への転居を希望し、さらに国などが防災施設などの計画を立てた場合、約半数が「転居してもよい」との結果がえられました。これを踏まえ同委員会では、地域コミュニティーを壊さないとする転居希望者の移住を想定した計画づくりを進めています。

2012年1月11日には被災10ヶ月を迎え、市議会・市民代表・各種団体の代表者ら19人で構成される「市災害復興計画策定委員会」の分科会では津波で住宅が損壊した避難者向けに集合住宅を建設するよう提言し、付近には集会所を設置するなどコミュニティー維持への配慮を求めています。また、津波を受けた地区には高齢者が多く住むことから介護施設の新設や一人暮らしの高齢者に支給される緊急通報システムの活用。高台への移住を希望する住民には、既存団地などの空き地を活用した移住策を検討するよう求めています。

NPOの被災者支援

北茨城市では応急仮設住宅は10戸しか建設されず、被災者は雇用促進住宅、教員住宅、民間借り上げの住宅に197世帯が入居しています。この内107世帯約350人が雇用促進住宅に入居し地域バラバラで入居してきました。避難所というプライバシーのない共同生活からの反動もあって、お互いに出会っても殆ど挨拶もなく、隣同士や上下階の方達とも会話すらない状況にありました。

避難所の頃から生活支援物資の配布や被災者のニーズ調査の活動を行ってきた市内のNPOウイラブ北茨城はこの雇用促進住宅の集会所を拠点に支援活動を開始しました。最初は生活支援物資の配布から顔馴染みになり集会所を「あすなろ村」と名付けて、被災者自らの自治活動をNPOが支援する形を作り上げました。

最初は、住民同士の顔つなぎ、情報交換の必要から「みんなで震災を語る集い」を開催し、入居期限問題、入居期限終了後の賃貸契約問題、団地内の無法駐車・大音量の問題、子供達の放射能被曝問題、顔が見えても名前知らずの問題等の課題が浮かびあがりました。

このような課題解決のため、子供を持つ「ママさんの集い」の開催による心情の共有、団地内コンサート、夏祭りなどのイベントを開催しました。また、ウイラブ北茨城の所属する「さわやか福祉財団」の企画する「ふれあい温泉バスツアー」を紹介し、その頃には20名で集会所の自主運営していた被災者住民は団地内の絆を深めるとともに、支援されるだけだと心苦しいので仮設住宅や避難所に立ち寄り被災者同士でエールの交換をしたいということになりました。その結果群馬県吾妻町の福島県南相馬市からの避難所、と福島県田村市の20キロ圏内警戒区域避難住民の仮設住宅も訪れ、交流を深めました。また子供達のいる世帯での東京ディズニーランドバスツアーも開催されました。

また、市長、総務課長、建築課長、秘書課長との意見交換会も開催し、当初取り交わした退去誓約書（2012年3月31日期限）の退去期限延長は市長も了承し、所管である国との交渉も約束された。

北茨城あすなろ会は完全な自治組織ではなく、住民以外も参加できるよう任意団体としてあり、当面は①声掛け隊②配食サービス③移送サービス④居場所運営を取り組むことにし将来的にはNPOとしてやりたいとの声が上がっています。

おわりに

2011年5月3日の憲法記念日に多くの地方新聞は震災復興の理念としての憲法を生かすべきだと社説で主張している。中でも北海道新聞社説は「希望の道しるべとして　憲法記念日」

として次のように述べています。

『社会のつくり直しへ　　震災前の東北は農水産物の豊かな供給地でありながら、高齢化と過疎化で展望が描けなかった。医療費の削減が暮らしの安心を脅かし、若者は仕事を求めて都会に去った。

震災前のこうした状況への反省がないままに政治が復興を主導するなら、これまでの格差や不平等をさらに拡大させかねない。人口と産業の中枢を東京に集中させて中央と地方の分断を生み、原発を過疎地に押し付けた愚を繰り返すだろう。

経済の効率だけを追い求めるやり方を転換し、人々の連帯と地域のコミュニティを基礎とした「共生」のビジョンを目指したい。』

震災は日本社会の抱える構造的諸課題、人口減少、少子・高齢化、地域コミュニティの希薄化等の問題を様々な面で先鋭化させました。震災を契機の本来求められている改革を加速されることが求められているのではないでしょうか。そして最も中心的なテーマとしてコミュニティの再生があると思います。

大阪哲学学校活動日誌（「通信」43 号発行以降）

2011. 1.22. 2011 年度総会＆新年・会員参加者交流会
1.22.『大阪哲学学校通信』第 43 号発行
2. 5.〈知の歴史〉入門講座「モイラとの出会い—オイディプスとソクラテスの場合」⑴
……講師・永野春男
2.19.〈知の歴史〉入門講座「モイラとの出会い」⑵　……講師・永野春男
3. 5.〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む ……講師・田畑　稔
第 16 回「アンシャンレジームの精神構造」
3.19.〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む……講師・田畑　稔
第 17 回「啓蒙主義の闘い」
4. 2.〈知の歴史〉入門講座・ヘーゲル『精神現象学』を読む……講師・田畑　稔
第 18 回「フランス革命とテロリズム」
5.14. 2011 年度開講の集い 《二つの課題》 その１　……問題提起・山本晴義
「東日本大震災と福島原発事故」
5.28. 2011 年度開講の集い 《二つの課題》 その２　……問題提起・山本晴義
「アラブ・アフリカの民主革命とアメリカ」
6.11.《東日本大震災から考える》⑴
「東日本大震災の被災現場からの考察」　……講師・大津俊雄
7.16.《東日本大震災から考える》⑵
「福島原発事故」　……講師・稲岡美奈子
7.30. 納涼・会員参加者交流会
「北茨城・福島の被災と支援の現場を訪ねて」 ……報告・平等文博、田畑　稔
8.27. 2010 年夏期合宿（大阪唯研哲学部会、季報唯研刊行会と共催） 於・信貴山
～ 28. シンポジウム「大衆文化と左翼運動」 ……報告者・藤井祐介、室伏志畔
研究発表１「鶴見俊輔『かくれ仏教』をめぐって」（木村倫幸）
研究発表２「身体論」（田畑　稔）
10. 8.「イラク帰還米兵アッシュ・ウールソンさんに聞く」
11.26.「フリードリッヒ・シラーの美学理論」　……講師・大槻裕子
12.11.「瓦礫の後に立つレーニン—世界の「終わり」と唯物論の再生」
……講師・白井　聡